令和7年度 日野市平和事業

平和派遣事業成果報告書

<沖縄・長崎・広島>



目 次

I 平和派遣事業の趣旨・目的			
2 平和派遣事業権	既要		1
3 平和派遣事業執	報告会		1
4 広島伝承者平和	和講話会		2
●派遣者発表 沖縄			
小学校	2年	おがわ こうすけ 小川 孝介 さん	4
小学校	6年	^{かとう ゆいか} 加藤 結花 さん	6
●派遣者発表 長崎			
小学校	5 年	あべ みずき 安部 瑞希 さん	9
小学校	6年	みねぎし もりほ 峰 岸 森歩 さん	11
●派遣者発表 広島			
中学校	2 年	いわの ひとみ 岩野 仁美 さん	14
小学校	5 年	おいぬま か ほ 生 沼 華歩 さん	16
中学校	 年	しょうだ みおり 正田 碧織 さん	18
小学校	5 年	とみざわ そういち 富澤 壮一 さん	20
中学校	年	^{みすみ さきほ} 三角 咲歩 さん	22
小学校	4 年	みやもと けいすけ 宮 本 佳 輔 さん	24
来場者アンケート			26
日野市民憲章/日	野市核兵	器廃絶・平和都市宣言	28

1 平和派遣事業の趣旨・目的

平成 26 年から始まった日野市平和派遣事業は、第二次世界大戦下で多大な戦火に遭った「広島」「長崎」「沖縄」の各所に、市内在住の小中学生及びその保護者を派遣し、平和について学んでいただく事業です。

また、学んでいただいた内容を発信し、広く市民と共有していただくことで、二次的な平和意識の伝播を促進し、日野市民全体への平和意識の啓発を図っています。

2 平和派遣事業概要

派遣期間 令和7年7月~8月派 遣先 広島、長崎、沖縄

派 遣 者 下表のとおり

(発表順、敬称略)

派遣先	派遣児童生徒
沖縄	小川 孝介
沖縄	加藤 結花
長崎	安部 瑞希
長崎	峰岸 森歩
広島	岩野 仁美
	生沼 華歩
	正田 碧織
	富澤 壮一
	三角 咲歩
	宮本 佳輔

3 平和派遣事業報告会

お集まりいただいた皆様に、派遣された皆様の思いを発表していただきました。発表された生の声に、参加者はそれぞれ平和への思いを馳せました。

日 時 令和7年9月6日(土)

会 場 多摩平の森ふれあい館 集会室6





4 広島伝承者平和講話会

平和派遣事業報告会と同日に開催。被爆体験伝承者の方を招き、被爆体験者から受け継がれた貴重なお話を伺う講話会を開催しました。

日 時 令和7年9月6日(土) 14 時50 分から 15時 40 分まで

場 所 多摩平の森ふれあい館 集会室6

講 師 被爆体験伝承者 沢村 智恵子(さわむら ちえこ) さん

参加費 無料

参加人数 43人

被爆体験伝承者 沢村 智恵子(さわむら ちえこ) 氏 プロフィール東京都青梅市在住、広島県広島市出身。

国立市の戦争体験伝承者育成プロジェクトに参加し、2016 年に広島原爆、2022 年に東京大空襲の伝承者として委嘱を受け、現在は「くにたち原爆・東京大空襲体験伝承者」として、両体験の講話を行っています。





●派遣者発表《沖縄≫





I 小学校

おがわ こうすけ 2年 小川 孝介 さん

ぼくは、おきなわにいってせんそうについて学んできました。

まずはじめに、旧海軍しれいぶごうに行きました。ごうのせつめいや、せんそうの写真がありました。ごうとは、ひみつきちみたいなもので、さくせんをたてる部屋や、信号室、発電気室などがありました。

日本へいがごうにたくさんいすぎて、ねるのも立ったままでした。ぜんぜん休めないと思いました。

じっさいに、ごうの中に入れました。このごうは三千人の人たちが、くわ やつるはしやもっこをつかって作ったごうです。

暗くてせまくてでも道が長く続いていて、あちこちにいろいろな部屋がありました。ぼくだったら、まよいそうだと思いました。

ほかには、せんそうの写真もたくさんありました。お母さんがこれゆうめいだよと教えてくれた「白はたの少女」の写真がありました。女の子が白いはたを持って歩いている写真です。帰ってからしらべると、自分の命をひっしに守ろうとしている七才の女の子をアメリカ人がとった写真だということがわかりました。

次に平和きねんしりょう館に行きました。そこには、大きなばくだんがてんじされていました。いまでもばくはつしそうで、こわかったです。

今回たくさん学んできて、せんそうはこわいこと、せんそうをしてはいけないことをみんなに伝えたいです。





かとう ゆいか2 小学校6年加藤 結花 さん

私は平和派遣事業で沖縄へ行きました。そこで、戦争に関する7つの施設に行きました。その中で も、特に印象に残った2つの施設について話します。

1つ目は、宜野湾市にある佐喜眞美術館です。近くには驚くほど大きな米軍基地が見えました。



(C) 2023 佐喜真美術館、ルミエール・プラス

沖縄戦の図という絵には、自決している様子や、血の海になっている様子がはっきり描かれてい ました。言葉のないたった1枚の絵からも戦争の悲惨さが現れていて、つらくなりました。

2つ目は、南城市にある糸数アブチラガマです。ガマというのは、自然にできた洞窟です。 この ガマは、陸軍の病院としても使われていた場所です。



懐中電灯を持って、ヘルメットをして入りました。天井から冷たい水が落ちてきて、見上げるとコウモリがいました。懐中電灯を消すと真っ暗で、天井から垂れる水の音しか聞こえず、とても恐怖を感じました。

語り部さんのお父さんが 4 歳のときにこのガマに隠れていたのだと話してくれました。15 歳から 19 歳までの 16 人のひめゆり学徒隊が、朝から夜まで休む隙もなく、最大 600 人もの 負傷兵の手当てをしていたそうです。しかし、負傷兵の中では、助けてもらえない人も多く、重症患者は見捨てられ、ほとんどの人が亡くなってしまいました。家族と会うために生き延びたかった方も多くいたと思います。



写真:2025年7月31日 読谷村シムクガマ

私が今このように元気に生きて、家族がいることは奇跡であり、ありがたいことなのだと、改めて感じました。

また、戦争があったことは悲しいことだけれど、その悲しい気持ちをたくさんの人が持っていることにより、今の平和があるのだと思います。私は今回の経験と平和への想いを忘れずに語り継ぐこと、そして二度と戦争というものを作らないことが、平和に対して必要なことだと学びました。

これからも、世界の平和やその人にとっての平和を大切にすること。そして、本当の平和とは何かを 考えながら生きていきたいです。

●派遣者発表 ≪長崎≫



3 小学校

あべ みずき 5年 安部 瑞希 さん

長崎での原爆関連施設を回った中で、特に心に残ったものを紹介する。

【長崎原爆資料館】

原爆資料館では、熱線や爆風、放射線による被害が展示されていた。その中で私は、 熱線によって火ぶくれをした瓦が心に残った。瓦の表面に触れるとブツブツしていて、 硬い瓦を変形させた威力に恐怖を感じた。それから、爆風は頑丈な建物も壊し、放射線 は人体への影響があることなどから、原爆は全てを壊す物だと思った。



写真-原爆投下時刻(11時2分)で止まった時計



写真-熱線で表面が変形した瓦

【平和公園の平和祈念像】

平和祈念像のポーズには意味が込められている。上方を指した右手は原爆のきょういを示し、水平に伸ばした左手は平和をすすめる姿であり、軽く閉じた目は戦争の犠牲者のめい福を祈っている姿である。写真で見るよりも



写真-平和公園の平和祈念像

大きかったので驚いた。また、力強い姿で「もう二度とあってはならないほど辛いことがあったんだよ」と力説しているかのように感じた。

【浦上天主堂旧しょうろう】

原爆投下当時の被害が残っている場所。原爆により天主堂は破壊され、現在の浦上天主堂の北側しゃ面まで崩れ落ちた。想像していたよりも大きく驚いた。これほどの威力があるものは、この世にあって

はならないものだと思った。



写真-浦上天主堂旧しょうろう

また、核兵器を使うことは長崎で最後になってほしいと感じた。

【まとめ】

私は、ニュースや本などで原爆のことを少しだけ知っていたけれども、実際に長崎に行き原爆の威力を知らなかったことに気付かされた。そして、この世に原爆のような核兵器はあってはならないものだと思った。また、原爆を体験していない私達でもいろいろな方法で伝えていき、もう二度と繰り返さないようにより多くの人に伝えることが大切だと思った。そして、原爆の恐ろしさを伝えるその心がけを失わないように日々を過ごしていきたい。



写真-現代の核保有国とその数



写真-山王神社 二の鳥居

4 小学校

みねぎし もりほ 6年 峰岸 森歩 さん

長崎に行ってみたくない?と母に言われ、「行ってみたい!」と返事をしたことが、平和 派遣事業に応募したきっかけでした。

長崎は、私のひいおばあちゃんの生まれ育った街だったそうです。

ちゃんぽんや皿うどんが有名なこと、そして原爆のことを少しだけ知っているくらいで、 自分にとってはどこか遠い世界の話のように感じていました。

私は、平和公園・原爆資料館・爆心地公園を訪れました。

平和公園では、平和の像の前に足場が組まれていたので、工事中かと思いました。 あとで知ったのですが、それは8月9日に行われる平和記念式典の準備だったようです。 公園内には平和の泉や、たくさんの国から贈られた平和を願う像や記念の樹がありました。

それぞれに「戦争のない世界をつくりたい」という気持ちがこめられていて、どれも心に残りました。

原爆資料館の中に入ってまず驚いたのが、まわりのほとんどが外国から来た人たちだったことです。

みんな真剣に展示を見ていて、笑っている人やマナーの悪い人は一人もいませんでした。 展示されていた、原爆で溶けてしまったガラスや焼けたものの一つ一つに、原爆の悲惨 さがあり、特に原爆の被害にあった人たちの映像が印象に残りました。

また、展示の中で、長崎はもともと原爆の第一目標ではなかったことを知って、とても おどろきました。

でも、さまざまな理由で長崎が選ばれてしまい、多くの命がうばわれたことを思うと、 悲しさで胸がいっぱいになりました。

そして、いろいろな国の人たちと同じ空間で展示を見ることができるのは、今が平和だからこそだということに気づきました。

爆心地公園では、モニュメント横の案内板に、原爆投下前の地図と、そこに住んでいた 人たちの苗字が書かれていました。

その多くの人が被害を受けたのだと思うと、こわくてたまりませんでした。

母と一緒に手を合わせ、「本当にこのすぐ近くで原爆が落とされたんだ…」と思うと、なんだか不思議な気持ちになりました。

視察のあと、ひいおばあちゃんの生まれた街を見に行きました。

ひいおばあちゃんは終戦の何年か後に亡くなったので、故郷に帰ることができなかった と母が教えてくれました。

そこには坂がたくさんあり、丘の上から長崎の街を見下ろすことができました。

そのとき、「長崎は山に囲まれている」ということがよく分かり、原爆資料館で学んだ「山のおかげで原爆の被害が少しおさえられた」という話を思い出しました。

実際にその風景を目にして、「悲しみの長崎」と言われている意味を、少しだけ実感できた気がしました。

8月9日、母と一緒に平和記念式典の中継を見ました。

平和の像の前にはお花がそなえられ、私が行ったときとはまったく違うようすになっていました。

中でも一番おどろいたのは、爆心地公園のモニュメントが、まるで泉のようになっていたことです。

私はてっきり、水を欲しがっていた被爆者への追悼の意味で水を入れているのかと思いましたが、実は雨でたまたま水がたまっていただけだったと知って、驚きました。 たしかに、お花をそなえるには水はじゃまだったかもしれません。

でも、「80年越しに神さまが、被爆者の気持ちを思って雨を降らせたのかもしれない…」とも思いました。

今の長崎は自然が美しく、人々のくらしも穏やかです。

昔、あんなにおそろしいことがあったなんて信じられないくらいです。

でも、その平和のうらには、たくさんの苦しみや努力があったのだと思うと、胸がいっぱいになりました。

そんな長崎に自分のルーツがあることを思うと、とても誇らしい気持ちになりました。 これからも、長崎で感じたことや学んだことを忘れずに、平和の大切さをまわりの人た ちに伝えていきたいです。





●派遣者発表《広島》





5 中学校

私は、広島に行き、戦争時の状況や、原爆の威力、自分が生まれる前に どれだけのことが起こっていたのかを知ろうと思いました。小学校の授業 で、日本に初めて原爆が落とされたことは知っていました。

初めは、袋町小学校平和資料館に行きました。そこは、爆心地から 460 m地点の学校で、朝礼の時間に被害にあったそうです。いつもの朝礼の時 に見知らぬ爆弾が降ってくると想像すると、とても怖いと思いました。学 校の壁には、伝言がいくつも書かれていました。当時の人達は、大切な家 族や知り合いを探すのに必死だったことが感じられました。原爆は、どこ に行っても同じ景色になるほど、半径2kmほどが一瞬にして爆風や爆撃に より、焼き尽くされ、崩壊したそうで、恐ろしかったです。広島城も爆心 地から1km地点にあり、爆風のみで天守閣が粉々に破壊されたそうです。

平和祈念資料館に行きました。そこには、原爆による被害が写真や実物 で展示されていました。変形した三輪車やびんを見ていると、私はそれだ けひどくなったものを見たことがなかったので、一瞬にして曲がったり、 焦げたりしたのがとても不思議でした。

原爆ドームに行ってみると、外も中もボロボロで悲惨でした。でも、そ れまで見学してきたものを考えると、そのまま残っていたのがすごいと思 いました。

初めて広島に行き、戦争当時の姿は原爆ドームくらいしか今は見られませんが、資料館などを残して当時のことを私たちにも伝えてくれている人たちがいるので、その思いを受け取り、戦争を起こさず、平和な暮らしを守っていけるように自分にできることを考えていきます。





6 小学校

おいぬま か ほ 5年 生 沼 華歩 さん

私は被爆四世です。

私のお母さんのお母さんのお母さん、つまり、ひいおばあちゃんは、13歳のとき、広島で被爆しました。 そのころの日本では治すことのできない、 ケロイドという深いやけどを顔や体にたくさん負いました。

その 10 年後、ひいおばあちゃんは「原爆乙女」と呼ばれ、 ケロイドを治すために、遠いアメリカまで手術を受けに行きました。 私は家族の話を聞くたびに思います。

「私が今、こうして生きているのは奇跡なんだ」 そして

「どうして、こんなことが起こってしまったのだろう」と。

今年、原爆投下から80年が経ちました。 私は広島の平和祈念式典に参加しました。 そして、原爆ドームや広島平和記念資料館を見学しました。

そこには、被爆した人が着ていた服がありました。 泥のようなものがつき、さわったらこわれてしまいそうでした。

被爆した人の絵もありました。 火につつまれた町、助けを求める人。 中には、こわくて見られないものもありました。

小さな三輪車もありました。 そこには、こどもたちの、とつぜん終わってしまった命がありました。

見ているうちに、私は強く感じました。

「いたみ」 「かなしみ」 「いかり」

原爆が落とされてから80年。

当時のことを知っている人は、少しずついなくなっています。

だからこそ、私たちが「あの日、何が起きたのか」を伝えていかなくてはなりません。

私はこの夏、広島で知った戦争のひさんさを、原爆の恐ろしさを、忘れません。

平和な世界のためには、 自分の意見だけでなく、相手の意見にも耳をかたむけ、 お互いを理解しようとすることが大切だと思います。

困っている人を助け、笑顔でやさしく接します。 私は、戦争のない世界になることを心から願っています そして、広島で感じたことを、これからも未来に伝えていきます。

①曾祖母 (大島鈴江)

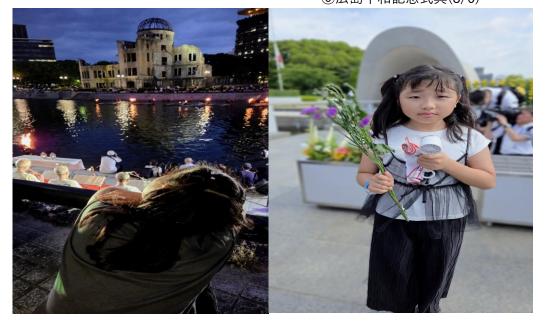
②曾祖母と原爆乙女たち

③曾祖母とリディアオリリー



④ひろしまかがり灯の祭典(8/5)

⑤広島平和記念式典(8/6)



しょうだ みおり7 中学校1年正田 碧織 さん

戦争を体験した方が少なくなってきている今、戦争を体験していない私は、広島に行くことで戦争と平和について深く知ることができるのではないかと考えました。

初めに、原爆ドームを訪れました。初めて見る原爆ドームは大きく、言葉では言い表

せない迫力がありました。本や想像だけではわからなかったことを、80年前のそのままの姿の原爆ドームが教えてくれました。

次に、元安橋を渡り、平和記念資料館を訪れまし



た。当時の人が使っていたものや写真、絵などから、原爆の恐ろしさや人々の苦しみをより深く感じました。「助けて」という人々の声が聞こえてくるような絵もありました。ゆがんだ自転車、しわくちゃになり血のついた服、破れたズボン、校章のついたボタン、名札、小銭入れ、生徒手帳、防空頭巾…それらから、当時の人々は原爆が投下されるまでは当たり前の生活を送っていたこと、人々の生活を原爆が一瞬で奪ったということがよく分かりました。中でも印象に残ったのは、ゆがんだお弁当箱です。お弁当箱は、亡くなった折免滋さんの下にあったものをお母さんが見つけたものです。中身は米・麦・大豆の混合ごはん、千切りにしたジャガイモの油炒めでした。滋さんは楽しみにしていたお弁当を食べることなく、亡くなりました。亡くなった滋さんと、炭になったお弁当を見つけたお母さんの気持ちを思うと、とても悲しくてたまりませんでした。また、後遺症と闘った青年の日記や、被爆による体調不良や被爆したことに対する差別

から働くことができなかった人の記録などから、原爆投下から時が経ってもつらい思い をした人たちがいたことを知りました。

次に、原爆により大きな被害を受け、たくさんの子供たちが亡くなった本川小学校、

袋町小学校を訪れました。本川小学校では昭和21年2月、袋町小学校では昭和21年6月に授業が再開されました。窓はなく、床板もなく、黒板もない、そんな中でもわずかな学用品で熱心に学習した



と書いてありました。子供たちが力強く生き、人々の協力や努力によって広島の町が少 しずつ復興していったことが分かりました。

広島を訪れ、実際に見て知ることで戦争や原爆の恐ろしさを強く実感しました。命や人々の生活、豊かな自然環境など、様々なものが奪われたことも知りました。原爆や戦争によって苦しんだ人の思いや失われた命を忘れずに、たくさんの人々の努力によって築かれた平和を守っていくことが大切だと思いました。そして、今回の平和派遣事業をきっかけに、戦争と核兵器についてこれからも学んでいきたいです。

地球から核兵器がなくなり、世界が平和になった時がきたら、平和記念公園の平和の灯は消えます。私は、いつか平和の灯が消えるのを見たいと思います。



8 小学校

とみざわ そういち5年富澤 壮一 さん

1. はじめに

ぼくは戦争のおそろしさをテーマにした「はだしのゲン」という本を読んで、戦争について興味を持ち、広島に学びに行きました。「はだしのゲン」という本は、戦争で3人の家族を失い、お母さんとゲンだけが生きていく話しです。これが自分だったらどう思うだろうと考え、ほんとうのきょうふがどういったものか、特にきょう味を持ちました。

2. 訪問した場所

最初に向かったのは、広島平和記念資料館です。資料館には、原ばくが投下された場面を映ぞうで再げんしているホワイトパノラマや、ぼろぼろになった服などが展示されていました。特に心に残ったのは、亡くなった3才の子供だけで埋めるのがかわいそうだったから、子供といっしょに三輪車もいっしょに埋めた、ということです。なぜ子供や一般人を多く殺されないといけないんだと思っているうちに、心がいかりと悲しみでいっぱいになりました。他にも中学生のい品などもありました。全体を見て、戦争にあった人たちは、どれほどのきょうふでおびえていたのかと感じました。

次に行ったのは原ばくドームです。途中には原ばくの子の像がありました。その像のモデルは、2才で被ばくして、12才で白血病になって亡くなったしまった貞子さんという人です。原ばくドームに着いた時、ぼくはとてもおどろいてしまいました。原ばくドームはほとんど骨組みだけになって、今にもたおれてきそうになっていたからです。言葉で言い表せないほど悲さんなものでした。

最後に行ったのは平和記念公園です。公園の中には、被ばくアオギリという木があります。これは、ばく心地から 1.3 キロメートルの所にありました。8 月 6 日に広島はやけ野原となり、このアオギリの木も死んでしまったと思われましたが、次の年の春に新しい芽を出したのです。それを見た人は、生きる希望とゆう気をもらいました。

3. 広島の復こう

原ばくで焼けてしまった広島には、75年間草も木も生えないと言われていました。それでも人々はもう一度、広島の町を元通りにしようと立ち上がりました。その後、国の仕事として、広島の町を作り直すという、特別な法りつが作られました。そしてついに、海外からの応えんも来ました。例えば、アメリカのフロイド・シュモーさんは、原ばくで家を失った人たちのために、1949年から仲間たちと「広島の家」を建て始めました。平和記念公園内には、フロイド・シュモーさんなど、広島に手を差しのべてくれた人たちの記念ひがあります。

4. まとめ

この訪問を通して、戦争は核兵器を使わないで終わらせなければならないと感じました。核兵器を使わないで戦争を終わらせることや、核兵器を使わない世界を作ることは、とてもむずかしいかも知れません。だけどぼくは、友達や家族を通して少しずつ広げることならできると思います。この世界にいる人々が少しずつでも核兵器を減らさないといけないと思います。今回の原ばくや戦争のこわさを知った経けんを友達などに伝えて、今後に生かして行きたいと思います。











9 中学校

みすみ さきほ |年 三角 咲歩 さん

私の曽祖父は、広島で医者をしていました。しかし、原子爆弾が広島に投下され被爆してしまった人の治療をしていた曽祖父は放射線の影響を受け、早くに亡くなったと母から聞きました。今回この平和派遣事業の機会をいただき、広島で起きたことや曽祖父のことを詳しく知るため、広島を訪ねることにしました。

8/6 の実態

1945年8月6日、その日は建物疎開のため多くの人が広島に動員されていました。建物疎開とは建物を壊して空き地をつくり火が燃え広がらないようにするためのものです。その日、広島に原子爆弾が投下されました。爆風や熱線などにより1945年の12月末までに約14万人もの人が亡くなり、直接被爆した人でなくても放射線の影響で脱毛や白血病などの症状が出ました。



曽祖父について

私は、曽祖父について詳しく聞くため、大伯父にあたる晃さんを訪ね、話を聞きました。私の曽祖父は広島の都心から離れた乃美という場所で外科医をしていました。原爆が投下されると被爆して怪我した人の治療をするために爆心地へ行くようにと政府に命令されたそうです。曽祖父は爆心地へ行き、10日間ほど滞在した後、トラックに被爆者

を乗せて病院へと運び治療をしました。その後、そんな曽祖父も徐々に体調を崩し、翌年の暮れ頃には病気で寝込むようになり、脱毛や高熱の症状が出たそうです。曽祖父は1947年3月に48歳で亡くなりました。そのとき、お葬式もせずにその日のうちに火葬されてしまったそうです。火葬されてしまったことには、噂が関係していると考えられていて、原爆などの知識がなかった当時は広島に行くとなにか悪いものがうつるという噂が飛び交っていたそうです。



被爆者に認定されるまで

曽祖父は今は被爆者として原爆死没者名簿に登録されていますが、最初から登録されていたわけではありません。曽祖父は直接被爆ではないためなかなか認められなかったのです。しかし、晃さんが2019年の12月から広島市と何度も登録についてのやり取りを繰り返し、ようやく登録されました。その頃には、登録の基準が改定され直接被爆者だけでなく、原爆が投下されてから広島に入った入市被爆者や爆心地での救護活動をした人、被爆した人の胎児なども被爆者として原爆死没者名簿に登録されるようになりました。



今回、広島原爆死没者追悼平和祈念館へも行き、曽祖父の名前を確認してきました。 大伯父の声があったことで曽祖父の名前があるんだなと改めて実感しました。

まとめ

このように、原爆は多くの人の命を奪い、生き残った人も苦しめられています。平和記念資料館で見た資料や大伯父の話から、本当に一発の爆弾で人の命も建物も生活も全て壊れてしまうんだなと悲しくなりました。しかし、今でも約9000発もの核兵器が存在しています。存在しているということは使われる可能性があるということです。そのような中でまた広島のような悲劇が起こされないよう核兵器の恐ろしさや今回学習したことを忘れないようにし、絶対に使ってはいけないと声を上げることが大切だと思いました。





JO 小学校 4年 宮本 佳輔 さん

ぼくはお父さんと一緒に、平和はけん事業で、7月20日から22日の2泊3日で広島を訪れました。

広島に行くのは初めてで、原爆が落とされた町を自分の目で見ることは少し怖かったです。

広島では、まず原爆ドームを見に行きました。そのあと、平和記念公園に行き、原爆の犠牲になった人たちへと、平和への祈りを捧げました。そして、平和記念資料館を見 学しました。また、原爆の被害を受けた本川小学校にも行きました。



一番心に残っているのは、原爆ドームです。もともとはとてもきれいな建物だったのに、原子爆弾によって一瞬でこわされ、今の姿になってしまいました。原子爆弾の爆発の瞬間、中にいた人は命を失い、建物も原型をとどめないほどの被害を受けました。

原子爆弾が爆発したときの温度は、なんと 3000 度から 4000 度もあったそうです。その後 1 年間で、14 万人もの命が失われたと知りました。14 万人という数は、想像できないほど多くて、しかも今でも正しい数はわかっていないそうです。

当時は助かったように見えても、その後、放射能の影響で病気になり、亡くなった人もいました。生き残った人の中には、「死んだほうが楽だった」と思うほどつらい思いをした人もいたことを学びました。そのことを知って、あまりにも悲しくて、涙が出そうになりました。

広島の町はほとんどあと形もなくなり、たくさんの人が亡くなりました。大切な家族や友達を失い、深い悲しみに包まれた人がたくさんいたと知って、胸がしめつけられました。核兵器は、絶対に使ってはいけないと強く思いました。

本川小学校の平和資料館では、係員の方からお話を聞きました。当時、小学校の校庭で遊んでいた生徒がたまたま、原爆投下時に、下駄箱に行ったことで、原爆から助かったけれど、そのあと、校庭にもどると、黒くこげた丸いものがたくさんあったそうです。それは、その子がそれまで一緒に遊んでいた子どもたちだったそうです。その話を聞いたとき、とても悲しくて、胸が痛くなりました。学校の壁には、爆発で飛んできたガラスの跡が今も残っていました。



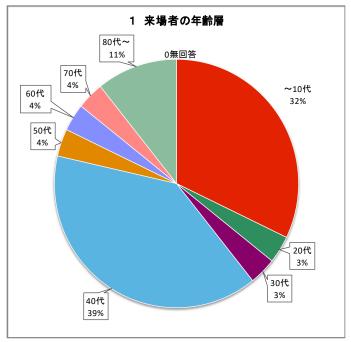


広島に原爆が落とされたことは知っていましたが、実際に現地に行き、話を聞き、戦争がどれほどおそろしいものかをはっきりと感じました。核兵器は、地球上に存在してはいけないものだと強く感じました。平和が一番大切です。ぼくは心から「もう二度と戦争はしてはいけない」と思います。争いはやめてほしい。世界中の人に「戦争をしてはいけない」と呼びかけたいです。

さいごに、今回、広島に行くいく機会をいただき、本当にありがとうございました。

☆ 来場者アンケート

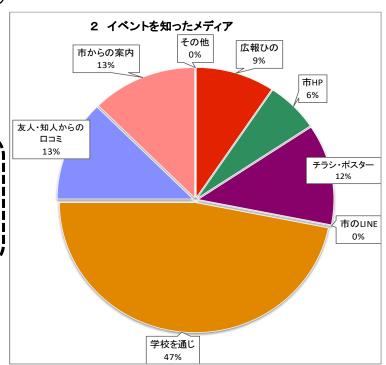
(1) 御来場者の年齢層



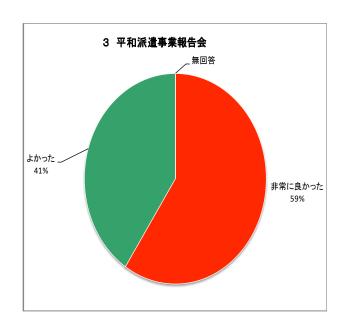
幅広い年代の方のご参加がありました。今後もあらゆる世代の方に来ていただけるようにしていきたいと思います。

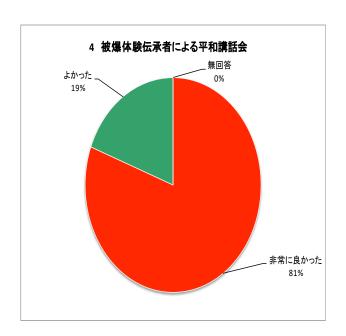
(2) イベントを知ったメディア

「広報ひの」や学校を通じて 配布したチラシなど、色々な メディアで知ってご参加いた だきました。



(3) 感想





参加された多くの方が「よかった」、「非常によかった」と 回答されており、大変好評で した。

自由記載では、「普段では、「普段では、「普段では、「ないないないないないできないできる。」を表しているです。」を表しているででででででできまないでできまながでできまながでできます。」を表していまができません。」を後れていまができません。といまができません。

日野市民憲章/日野市核兵器廃絶 平和都市宣言

日野市民憲章 =

昭和58年1月1日制定

わたくしたち日野市民は、多摩川・浅川につづく平野と丘陵の自然環境に恵まれたこのまちを、生活の中のふるさとと考え、みんなのしあわせのためにこの市民憲章を定めます。

- 1 元気に働き いきいきとして 心ゆたかなまちをつくりましよう
- 1 手をつなぎ ともに健康で 明るいまちをつくりましよう
- 1 自然を守り 緑と清流と太陽の 美しいまちをつくりましよう
- 1 人を大切にし 弱い人にも子どもにも 思いやりのあるまちをつくりましよう
- 1 文化をつちかい うるおいのある 平和なまちをつくりましよう

日野市核兵器廃絶・平和都市宣言

昭和 57 年 10 月 8 日議決

巨大な量の核兵器は、米ソ両国の戦略兵器制限交渉などをもつてしても、もはやそ の拡大を止められない事態となつている。

ひとたび核兵器が使用されることになれば、その結果は全人類とその文明の滅亡で あることはいうまでもない。

日野市は、核兵器が地球上から姿を消す日まで、その廃絶を叫び、平和が市民生活の基本であるとの理念のもとに、ここに日野市が核兵器廃絶・平和都市であることを 宣言する。

令和7年度日野市平和事業 平和派遣事業成果報告書<沖縄・長崎・広島>

令和7年10月 発行

発 行 日野市企画部平和と人権課 東京都日野市多摩平2丁目9番地 多摩平の森ふれあい館 電話(042)584-2733

